

きつねの恩返し

むかし、村に太郎兵衛と次郎兵衛というふたりの若い衆がいました。ふたりは大の仲よしで、いつもいっしょに野良仕事に出かけました。また、帰りもいっしょです。

ふたりは、きょうも仕事に精を出しての帰りに、いつもの川の土手を通りました。

「太郎さ、今年は、豊作だぞ。」

「ああ、今年の夏はよく晴れて暑かったからなあ。どの稲も重そうに穂をたれとるぞ。よかった。よかった。」

ふたりが話をしながら歩いていると、急に川の方から何やらピチャピチャと音がしました。

「おい、次郎さ。何の音だ。」

「何だろう。川の中から聞こえてくるぞ。ちよつと見てみよう。」

ふたりが近づいてのぞいてみると、小犬がおぼれているではありませんか。

「小犬だ。かわいそうに。きつと土手を歩いていこううちに、ころげ落ちたんだらう。」

「かあちゃんはどこだ。早く家に帰れよ。」

と、いいながらふたりは、その小犬を助けてやりました。

やがて、辺りが暗くなってきたころ、東の空から月が出てきました。土手には彼岸ひがん花がいちめん咲いています。

「ところでお前、庄屋しやうさんとのむすめさんが、よめに行くこと知つとるか。」

「ええ、本当か。どこへよめ入りするんだ。」

「なんでも、となり村の大家おおやさんのところらしいぞ。」

「ああ、わしも、かわいいよめごがほしいなあ。」

「なあ、わしは、与吉よきちさんとの花ちゃんがかわいくてええと思うんだけどどうかなあ。」

「わしは、為藏ためぞうさんとの菊きくちゃ



んだ。氣立てがいいし、だいいち働き者だからなあ。」

ふたりはもう年ごろで、ぼつぼつよめさんのほしい年だったのです。

「そうだ、今晚どつかのむすめっこの家でも遊びに行かねえか。」

「ああ、それがええ。ひと風呂あびてあせを流してさっぱりさせたら、いつちよ出かけるか。」

そんな話をしながらふたりは、家の近くまでやってきました。するとどうでしょう。急にふたりの前に見慣れない美しいむすめさんが現れました。そして、

「こんばんは。わたくしは、となり村の者ですが、今夜、家へ遊びに来ていただきこうと思っておむかえに参りました。」

と、かわいい声でいうのでした。ふたりは、これまでの話を聞かれたのではないかとびつくりしながら、

「わしらは、今、田んぼの帰りだで、まだ晩飯もすんどらん、また後でな……。」
と、いいかけるのをさえぎって、

「いいえ、夕飯も準備してございます。そのままおいでいただければけっこうです。」

「太郎さ、どうする。」

「ああ、どうしよう。わしらの話を全部聞いていたのか、何だか気味が悪いなあ。」

「何のえんりよもいりません。おいしいお酒もたくさんあります。どうか来てくださいな。」

初めはふたりも急なことなので、どうしようか迷まよっていましたが、むすめが手をとらんばかりにさそいますので、ついむすめのいう通りについていきました。そしてとても大きなお屋敷やしきに案内されました。通された座敷ざしきも野良着姿ずだてでははずかしくなるような立派りっぱなところで、ますますおどろいてしまいました。

「大きな屋敷だで、きつとしんしよがええな。」

〈金持ち〉

「ああ、この座敷も見事だて。こんなの見るのは、初めてだ。」

ふたりがおどろいていると、次々に酒や料理が運ばれてきました。

「あれえ、うまそうなごっそうばっかだ。」

「酒もうまいぞ。」

ふたりは、うれしくなつて、すっかりごちそうになりました。おまけに、帰りにはおみやげまでもらつて、ごきげんで家へ帰りました。

そして、次の日、ふたりはいつものようにつれ立って田んぼへ出かけました。そこへ、遊び仲間の矢助やすけがやってきました。

「お前ら、夕べは、どこへ行つた。」

「あいや、ちよつとな。」

ふたりは、にやにやしなから答えました。

「まあ、ええわ。きんによ、きつねが出たの知つとるか。」

「ほんとうか。」

「となり村で、祝言しゅげんがあつたんだけど、その席で準備しておいたはずの料理と引出物がふたり分消えたんだと。それで、大きわぎになつたらしい。だけど、だけれかが『きつとこれは、きつねのしわざにちげえねえ。こんな月夜にや決まつてきつねが出る



もんだて。』といったもんだで、きつねに化かされたということになってなあ。だけどきつねはお稲荷いなりさんのお使いだで、めでたい祝言の場に現れるというのはえん起きがいいぞ、ということになってだれも腹はらを立てんかったげな。」

「へえ、そんなこともあるんだなあ。」

その話を聞いて、ふたりは、自分たちの助けた小犬が実は子ぎつねだったこと。となり村の美しいむすめはその親ぎつねの化けたものらしいことを知りました。それにしても、子どもの命を助けてもらった恩を返すとは、かしこいきつねだと、ふたりは顔を見合わせてひそかに笑わらいました。

森岡地区に伝わる話です。

これまでの話に出てきたきつねは、人を化かす動物でした。しかし、この話のきつねは、村人に親おやしまれてるようです。きつねは、稲荷さんのお使いとされ、うらないの力ももっていると考えられ、古くから人々のくらしと深いかわりをもってきました。